

322
164



語法要覽



文學博士
佐々政一校閱
大石市太郎著

東京
光風館藏版



始



322

164



覽要法語



士博學文

閱校一政々佐

著郎太市石大

京 東

版 藏 館 風 光

322-164



文學博士 佐々政一校閱
大石市太郎編

法要覽

東京 光風館藏版

大正
6. 10. 18
内交

緒言

一、本書は主として高等女學校用として編纂し、努めて實際に適切ならしめんことを期したり。

一、本書編纂に際し、特に意を用ひたるは

第一、簡明なる一覽表としたること。こは生徒の記憶に便せしむると共に教授者の生きたる説明の餘地多からしめんとてなり。

第二、動詞、形容詞、助動詞の條には、表の上下に文語と口語とを對照せしめおきたること。生徒は動もすれば口語と文語とを混雜錯綜する恐れあるを以て之を避けしめんがためなり。

第三、文例練習は多く普通に行はるゝ讀本の文章中より採り、正誤の練習は生徒の作文中より得來れること。以て講讀、作文と相聯關し、相啓發せしめんことを期したり。

第四、國語假名遣一覽の如きも、實驗に徴し、つとめて簡明ならしめ、之を卷末に附したること。初年級に於て之を課し、次に文法に進むを便なりと信したればなり。

文學博士佐々政一先生は著者に深厚なる同情を寄せられ、本書のために嚴密なる校閲の勞をたまはりたり。茲に深く感謝の意を表す。

大正六年七月

著者

語法要覽

目次

第一 文法一覽

一 單語	一
二 文章	二
三 名詞	三
四 代名詞	三
五 動詞	四
六 動詞の活用 その一 (文語、口語對照)	五
七 動詞の活用 その二 (文語、口語對照)	六
八 動詞の活用 その三 (文語、口語對照)	七
九 動詞の活用 その四 (文語、口語對照)	九
一〇 動詞の活用形 (文語、口語對照)	一〇
一一 動詞の活用表 (文語、口語對照)	一二
一二 形容詞 (文語、口語對照)	一四
一三 形容詞の活用表 (文語、口語對照)	一五
一四 助動詞 (文語、口語對照)	一六
一五 助動詞の種類	一七
一六 助動詞の活用	一八
一七 動詞と助動詞との連續法	一九
一八 副詞	二一

第二 國語假名遣一覽

一九 感動詞	二二
二〇 接續詞	二二
二一 助詞 その一	二三
二二 助詞 その二	二四
二三 動詞の送り假名の注意	二五
二四 音便	二六

一 わは	二七
二 いひ	二八
三 うふ	二九
四 ええへ	三〇
五 おをほ	三一
六 じぢ	三二
七 ずづ	三三
八 オ列音につゞく延音	三四

第三 字音假名遣一覽

一より二六まで	三五
---------	----

目次終

語法要覽

第一 文法一覽

一 單語

別類	例	定義
名詞	花。咲く。鳥。啼く。	單一にして意味ある音聲。
代名詞	は。うるはしい。花。で。ある。	
形容詞		
助動詞		
感動詞		
助詞		
副詞		
動詞		
接續詞		
以上九種の單語を九品詞といふ。		

〔備考一〕音聲を目に見るために寫し出したるものは文字なり。文字に假名、漢字等あり。
 〔備考二〕假名の五十音圖は左の如し。その各行、各列は語記すべし。

行	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
ア行	ア	イ	ウ	エ	オ
カ行	カ	キ	ク	ケ	コ
サ行	サ	シ	ス	セ	ソ
タ行	タ	チ	ツ	テ	ト
ナ行	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ行	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ行	マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ行	ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
ラ行	ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ行	ワ	キ	ウ	エ	オ

〔練習一〕次の文の單語を示せ。

- 一、花は笑み、鳥は歌ふ。
- 二、一年の中春ほど楽しくおもしろきはなし。
- 三、我等は新たに此の學校の生徒となりぬ。
- 四、事をなすには始めに計る。
- 五、一年の計は元旦にあり。
- 六、昔より勝れたる人は皆自修の人なり。
- 七、好きこそ物の上手なれ。

二文章

定義	文の成分	文の成分より分ちたる文の種類	文の諸例
二つ以上の単語を集めて纏りたる意を書き表はしたるもの。	<p>一、主語<small>(動作の主となる語)</small> 花咲く。鳥が啼く。</p> <p>二、説明語<small>(主語の動作等を説明する語)</small> 花咲く。鳥が啼く。</p> <p>三、補足語<small>(説明語の意味を補足する語)</small> 彼は手紙を書く。父財産を子に譲る。</p> <p>四、修飾語<small>(主語、説明語若くは補足語に添へて意味を詳しく表はす語)</small> 愛らしき子供眠れり。火盛に燃ゆ。彼は長き手紙を書く。</p>	<p>一、主語と説明語とよりなる文 花咲く。</p> <p>二、主語と補足語と説明語とよりなる文 娘母に似たり。彼は書を読む。</p> <p>三、主語と補足語と説明語と修飾語とよりなる文 老いたる父は貯へたる財を娘に與へぬ。</p>	<p>一、単文 今日ほよき日なり。</p> <p>二、複文 花咲き鳥啼く春のけしきこそをかしけれ。</p> <p>三、倒置文 仰けば尊し、わが師の恩。</p> <p>四、省略文 宿はと問は、いかか答へん。</p>
			<p>一、文語體 花美し。 直ちに起く。</p> <p>二、口語體 花が美しい。 すぐに起きる。</p> <p>三、候文體 花美しう咲き出で候。 直ちに起き出で候。</p> <p><small>(備考)</small> 文語に文語文法、口語に口語文法あり。</p>

〔練習二〕 次の文を各成分に分解せよ。

- 一、春風静に吹く。
- 二、春風柳の枝を吹く。
- 三、たくましさ馬が速に走る。
- 四、牛大いなる車を徐にひきゆく。
- 五、艱難汝を玉にす。
- 六、父母の恩は山よりも高し。
- 七、健康なる精神は健康なる身體に宿る。
- 八、名残の光暫くは天の一方に輝く。
- 九、夕風涼しく吹き渡れば、浮べる雲いつしか消えぬ。
- 十、月落ち鳥啼きて、霜天に満つ。

三名詞

定義 人物、場所等の名を表はす語。

清少納言、	乃木大將、	軍人、	生徒、
櫻、	花、	青柳、	草木、
日本、	東京市、	都、	田舎、
心、	聲、	春、	秋、
性質、	舉動、	深切、	考へ、
赤、	白さ、	深み、	暑さ、
一つ、	二つ、	第三、	四番地、
			五町歩、
			東、
			喜、

例

〔備考〕 名詞はがといふ語を連ねて常に主語となる。

四代名詞

定義 名詞に代へて用ふる語。

人の名の代りに	私、	我等、
人の名の代りに	あなた、	諸君、
人の名の代りに	彼、	彼等、
人の名の代りに	誰、	
事物の名の代りに	これ、	あれ、
事物の名の代りに	そこ、	かしこ、
場所の名の代りに	こゝ、	いづこ、
場所の名の代りに	こなた、	いづかた、
方向の名の代りに	そなた、	かなた、

例

〔練習三〕 次の文中につきて名詞を指摘せよ。

- 一、都會と田舎とはいづれが住みよかるべきか。
- 二、街路は四通八達し、電信線は蜘蛛の巣の如く大厦高樓は鱗次櫛比す。
- 三、春の花見、わらびとり、秋の紅葉狩、茸狩、夏の涼螢獵、冬の雪景色の如きは都會の人の深く羨む樂ぞかし。
- 四、傳染病などの流行は人家稠密の地に始る。
- 五、知見を擴め、技能を磨かんと欲する者、又は大いなる事業に従はんと欲する者は、到底田舎にのみ止ること能はざるべし。

〔練習四〕 次の文中につきて名詞、代名詞を指摘せよ。

- 一、思ふに都會の便利に代ふるに、田舎には長閑けさ静けさあり。
- 二、彼の繁華に代ふるに、これの心安さあり。いづれをまされりとも定めがたし。
- 三、かの危険なきは、其の失を償うて餘あるべし。
- 四、汝自身の成功のために規律は之を嚴守すべし。
- 五、今こそ一俵なれ。これを種として勤勞せば我家を興さんこともあるべし。

五動詞

定義

事物の動作をいひ表はす語。

例

書を読み文を學ぶ。
よく舅姑に事へ、又よく家事を治む。

飛ぶ、	落つ、	起く、	堪ふ、	絶ゆ、
咲く、	著る、	信ず、	復習す、	
見る、	飲む、			

〔練習五〕 次の文中より動詞を指摘せよ。

- 一、人々喜びて、手の舞ひ、足のふむところを知らず。
- 二、明け行くまゝに見渡せば、前面の一島草木青々として、花開き、鳥さへづり、土人は驚きて此の新來の客を眺めて立てり。
- 三、船員皆歡喜してコロンブスの身邊を圍み、争ひてこれまでの不從順なりし罪を謝せり。
- 四、前のそしりし者、怒りしもの、罵りし者、泣きし者皆争ひてコロンブスを歡迎せり。
- 五、北條早雲が小田原城に據りて次第に其の權力を四隣に張らむとせる頃なりき。

六動詞の活用 (その一)

定義

動詞の語尾がいろいろに變化すること。

種類		例		定義
行	四	花	文	動詞の語尾がいろいろに變化すること。
語根	咲	け く き か	語	
語	カキクケコ	ド 春 タリ	文	動詞の語尾がいろいろに變化すること。
尾	カキクケコ	ド 春 タリ	語	
行	四	花が咲	口	動詞の語尾がいろいろに變化すること。
語根	咲	け く き(い) か	口	
語	カキクケコ	ド 春 タ ウ	口	動詞の語尾がいろいろに變化すること。
尾	カキクケコ	ド 春 タ ウ	語	

〔備考〕

動詞の活用せる部分を語尾といひ活用せぬ部分を語根といふ。

語根 語尾
 さい 咲 か き く け

〔練習六〕

次の文中より動詞を抽出し、その語根と語尾とを検し且つ其の語尾の變化をも検査せよ。

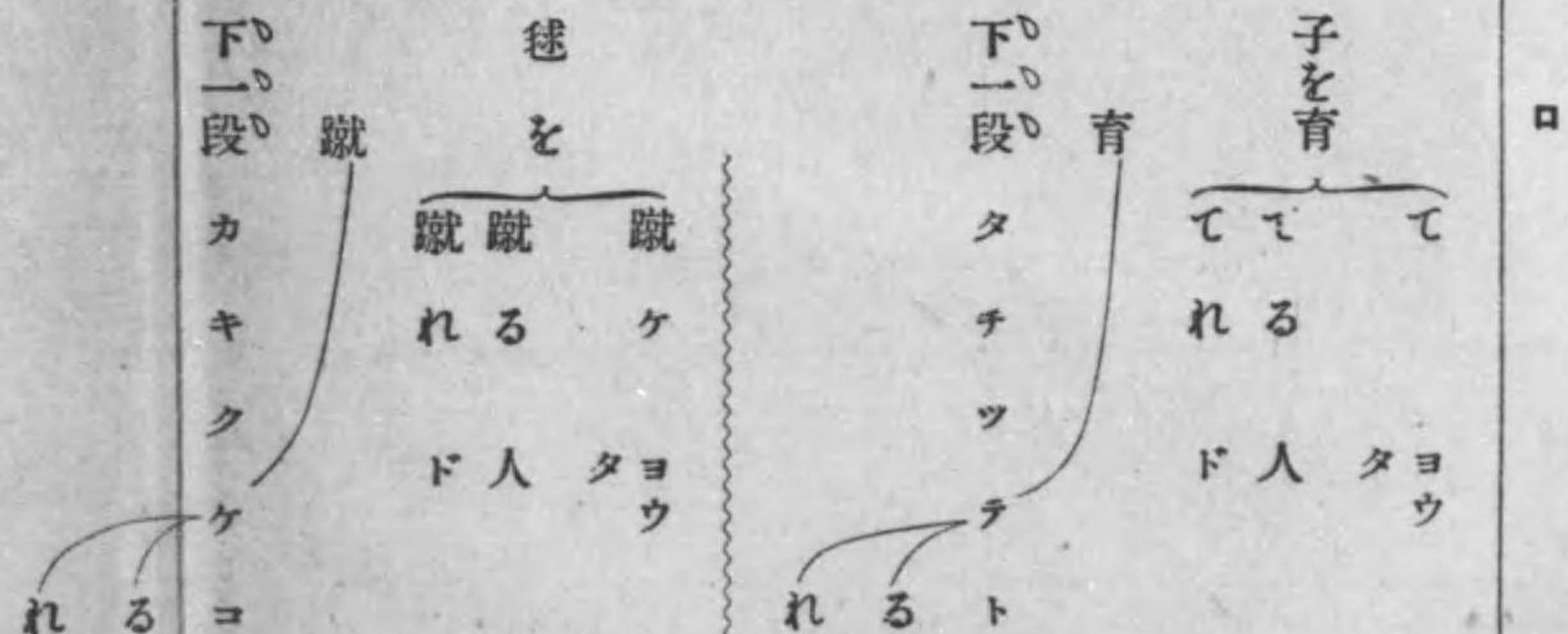
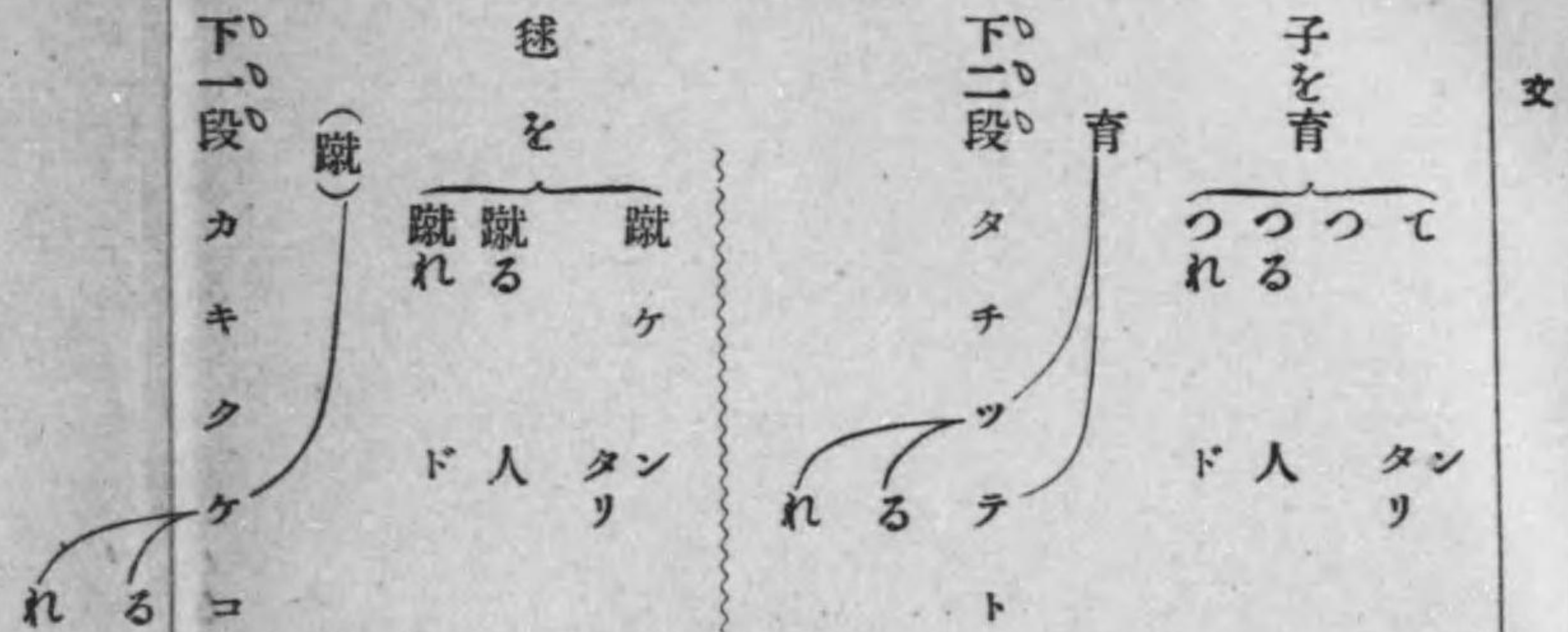
- 一、やがて、風俄かに吹きおろす。
- 二、木々の蟬は鳴きやみ、蜘蛛はちぢこまりて巢のまん中にぶらさがる。
- 三、雷の音おし出す様に南より西へと鳴りわたる。
- 四、雨全く霽る。窓を開ければ風さわやかに心地よし。

七動詞の活用 (その二)

段 一 上	段 二 上	種類	例	
ワ マ ハ ナ カ ア	ラ ヤ マ ハ タ カ	行	<p>上¹段⁰ (著) 羽織を カキ 著 著 著 ク れる る ケ コ コ</p> <p>上²段⁰ 起 カキ 起 ク 起 ケ コ</p> <p>早く起 くくくき れる ド人 タン リ</p>	<p>文 語</p>
(居) (見) (干) (煮) (著) (射)	こ むく うら し お お (懲) (報) (恨) (強) (落) (起)	語根		
ゐ み ひ に き い	り い み ひ ち き	語		
	る ゆ む ふ つ く			
ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ る ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ	る ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ る ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ			
ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ れ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ	る ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ れ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ	尾		
段 一 上	段 二 上	種類	例	
(居) (見) (干) (煮) (著) (射)	こ むく うら し お お (懲) (報) (恨) (強) (落) (起)	語根	<p>上¹段⁰ (著) 羽織を カキ 著 著 著 ク れる る ケ コ コ</p> <p>上¹段⁰ 起 カキ 起 ク 起 ケ コ</p> <p>早く起 き き き れる ド人 タヨ ウ</p>	<p>口 語</p>
ゐ み ひ に き い	り い み ひ ち き	語		
ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ る ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ	る ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ る ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ			
ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ れ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ	る ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ れ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ	尾		

八動詞の活用 (その三)

下二段	段	二	下	種類	例									
カ	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	行	種	類	文
(蹴)	う	ふ	おぼ	なが	をし	か	そだ	や	う	(得)				
け	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	語	尾	文	
	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	語	尾	文	
ける	うる	る	ゆる	むる	ふる	ぬる	つる	する	くる	うる	語	尾	文	
けれ	うれ	れ	ゆれ	むれ	ふれ	ぬれ	つれ	すれ	くれ	うれ	語	尾	文	
	う	ふ	おぼ	なが	をし	か	そだ	や	う	(得)	行	種	類	口
(蹴)	う	ふ	おぼ	なが	をし	か	そだ	や	う	(得)				
け	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	語	尾	口	
ける	うる	る	ゆる	むる	ふる	ぬる	つる	する	くる	うる	語	尾	口	
けれ	うれ	れ	ゆれ	むれ	ふれ	ぬれ	つれ	すれ	くれ	うれ	語	尾	口	



〔備考一〕 上二段「恨む」を四段活用の動詞として用ふるも妨なし。〔文法上の許容〕

〔備考二〕 下一段の動詞は「蹴」の一語のみ。

〔備考三〕 上一段の動詞は左の十一語普通に用ひらる。

鑄る、射る、著る、煮る、似る、干る、
見る、顧みる、居る、率ゐる、用ゐる、(へ行上二段にも活用す)

〔備考四〕 四段、上二段、下二段の動詞を識別する簡單なる方法を示せば左の如し。

イ、四段はア列より ず_レに連る。

例 咲かず、 讀ま_レず、

ロ、上二段はイ列より ず_レに連る。

例 落ち_レず、 起き_レず、

ハ、下二段はエ列より ず_レに連る。

例 受け_レず、 捨て_レず。

〔練習七〕 左の動詞の活用を検査せよ。

開く、 過ぐ、 煮る、 騒ぐ、 致す、 起く、 待つ、
恥づ、 云ふ、 綻ぶ、 惜しむ、 報ゆ、 知る、 見る、

〔練習八〕 次の文中の動詞並にその活用を示せ。

- 一、兄は弟をいつくしみ、弟は兄を敬ひかしのつきて、梯順の道を盡すべし。
- 二、兄弟は父母を同じくして生るゝ者なれば同根連枝と云ふ。
- 三、見わたせば眺むれば見れば須磨の秋。(芭蕉の句)
- 四、昔の人は今の人のやうに理を説いて教へることが少かつた。
- 五、寢覺の牛の聲がゆるやかに響いて夏の短い夜はやがて明けた。
- 六、故道に積る木の葉をかきわけて天照神の足跡を見ん。(二宮尊徳の歌)
- 七、翁は朝まだきより山に入りて薪をとり、夜は更くるまで繩をなひ、草鞋を作りて、ひたすら母のため弟のためと、一寸の日影も惜しみて立働さけり。
- 八、人と生れて聖賢の道も知らずに過ぎなんは口惜しきことの限りなり。
- 九、纔かに得たる大學の書物を離さず、薪こる山路の行き歸りにも歩みながら讀みふけりたり。
- 十、此のうちにも、翁が家を興さんと思ふ心は未だ一日も携えず。

九動詞の活用 (その四)

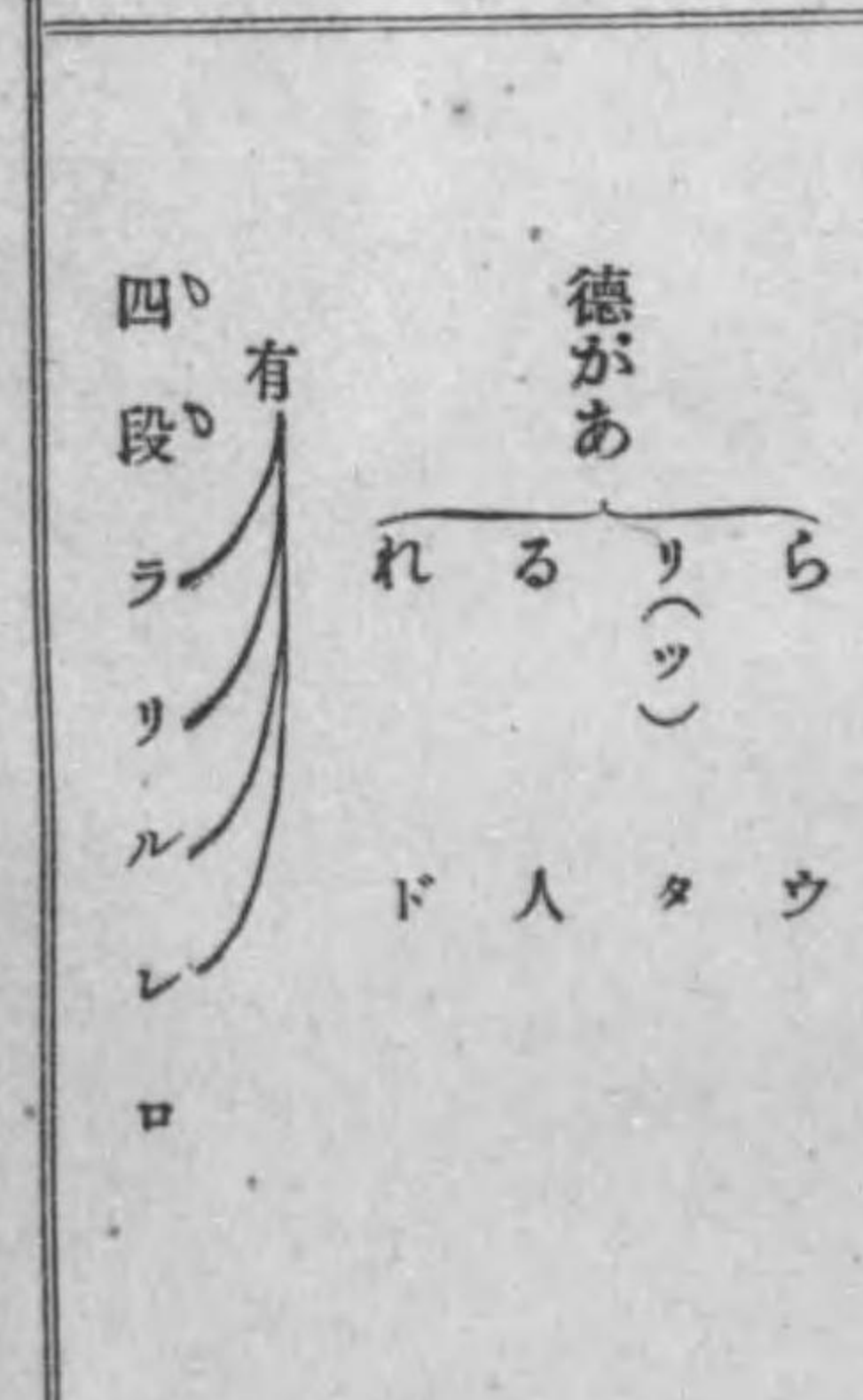
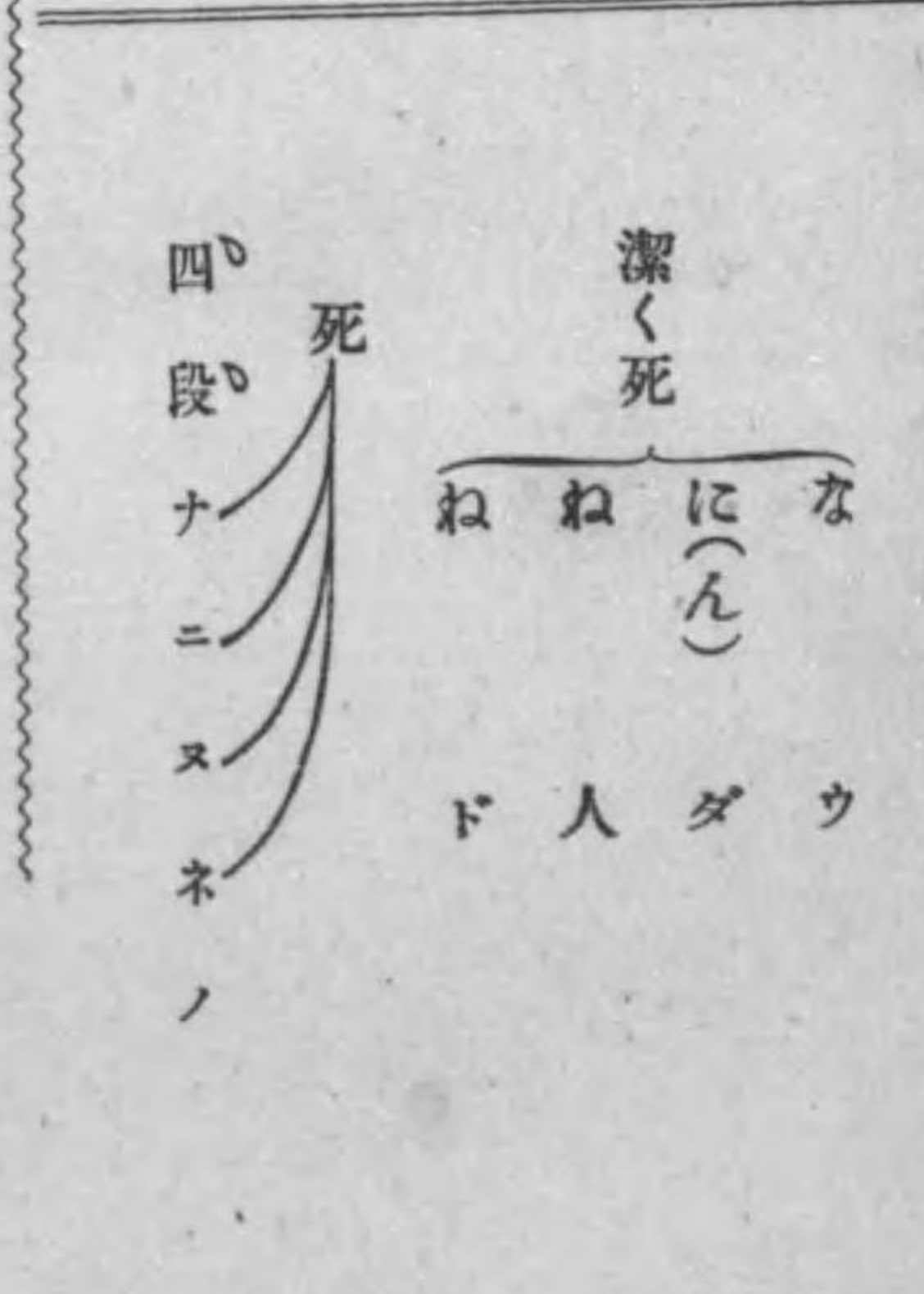
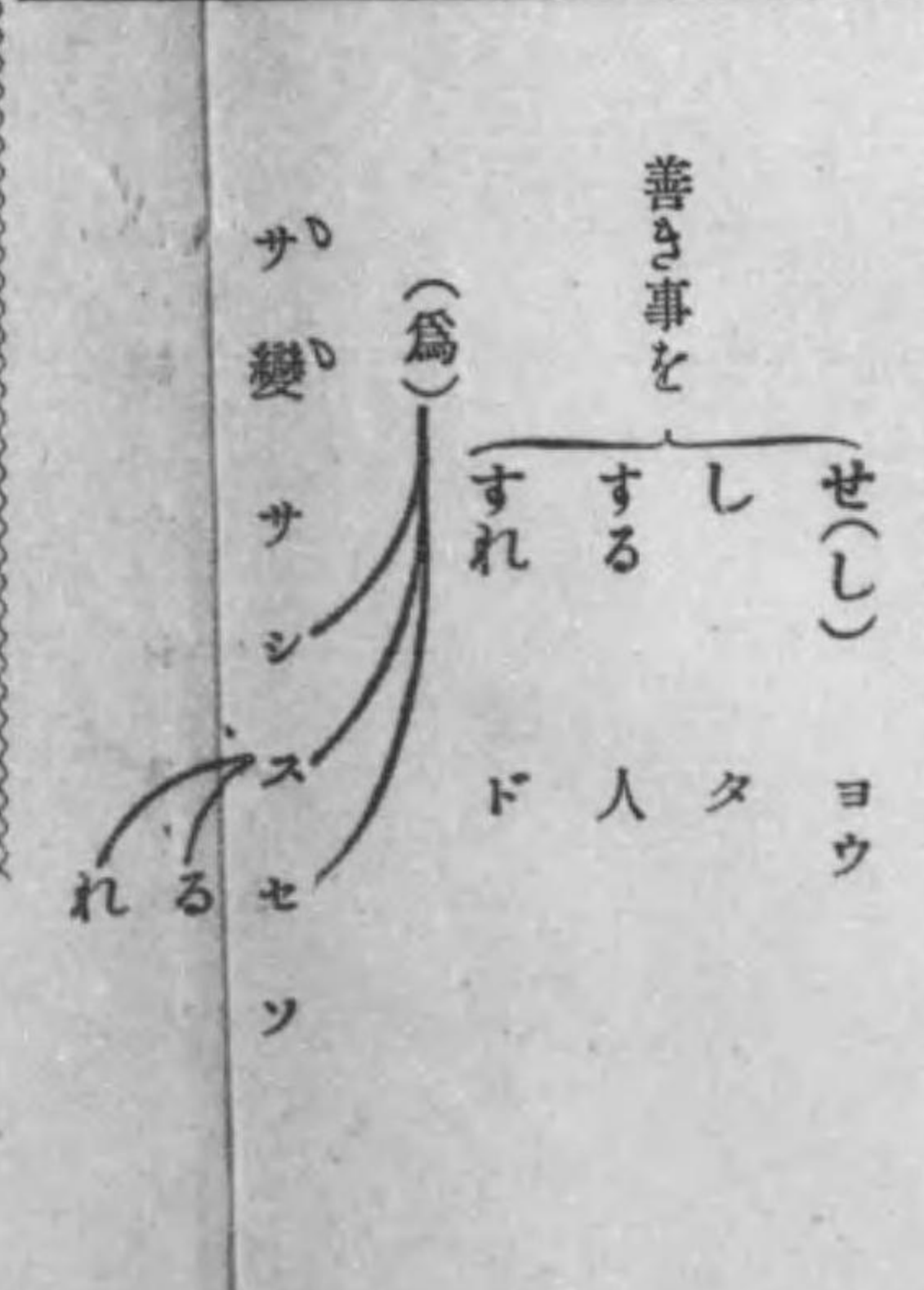
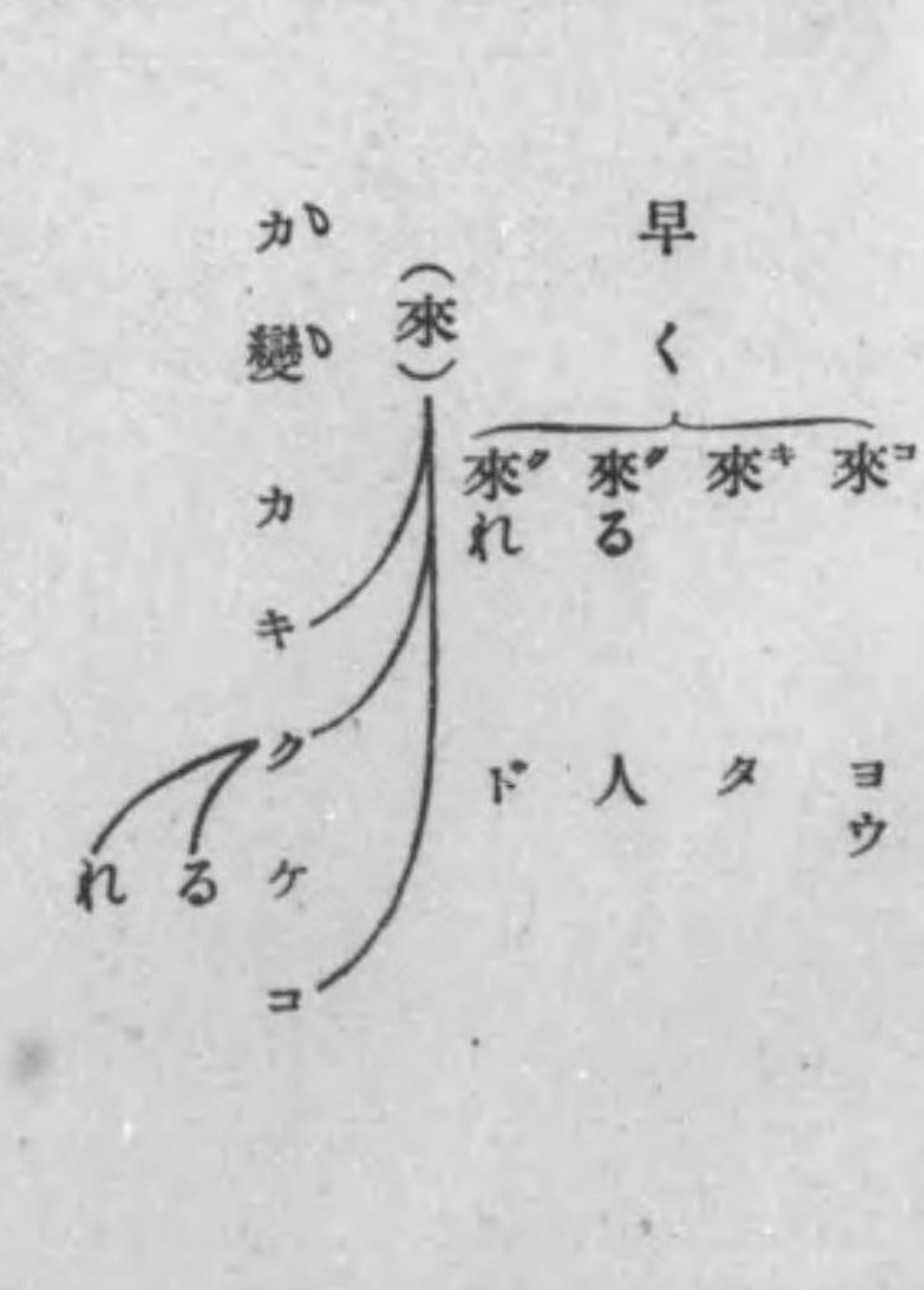
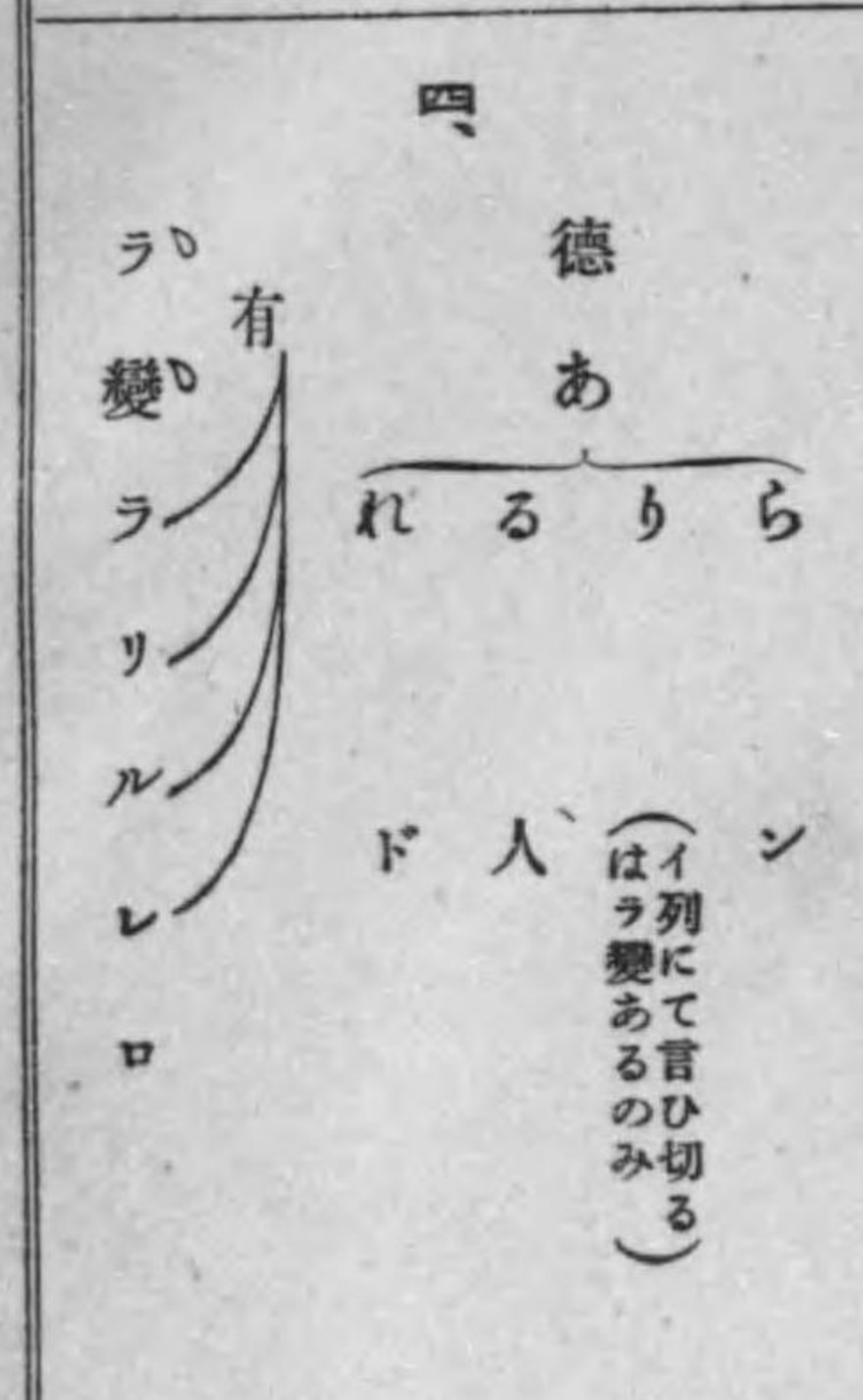
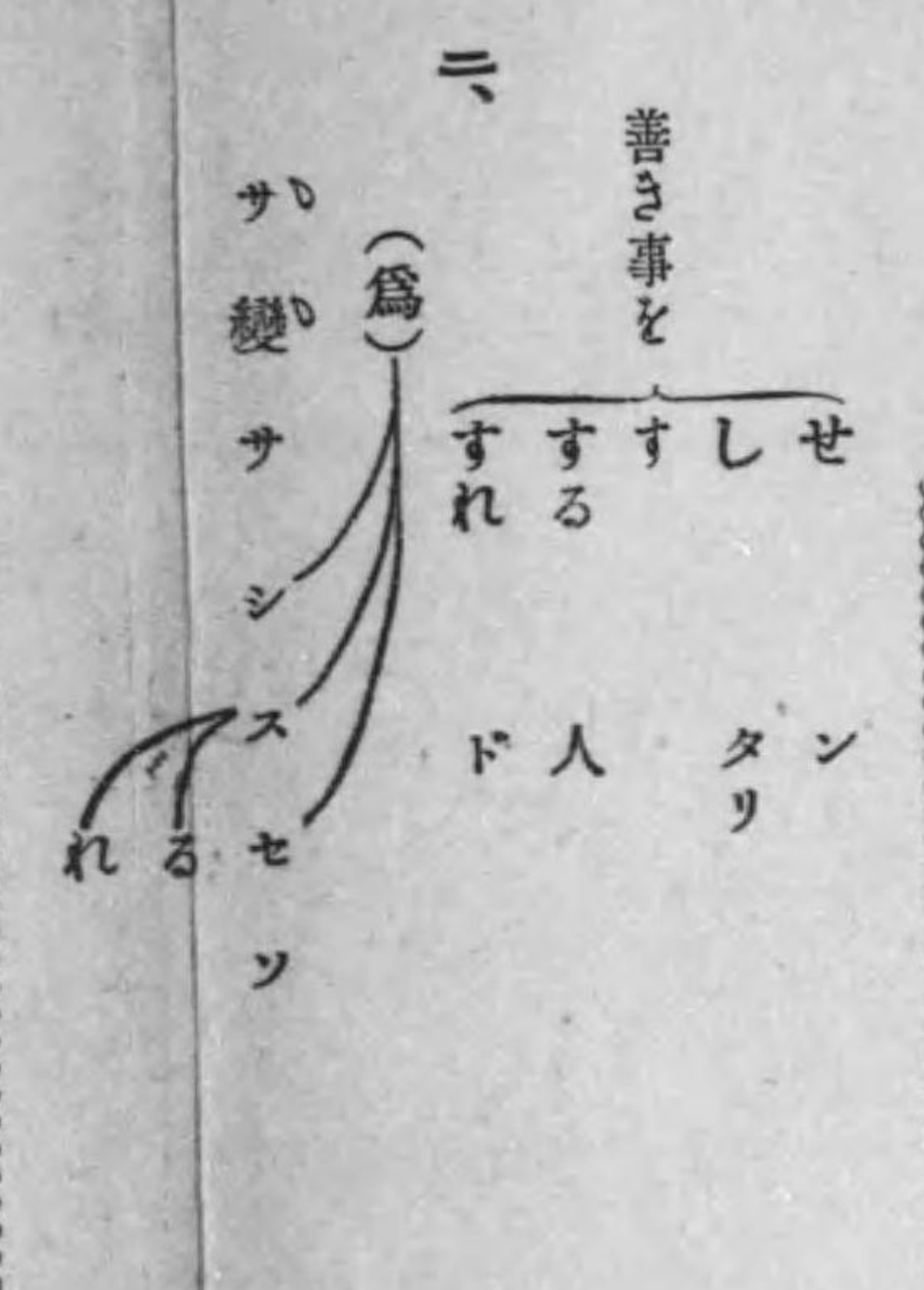
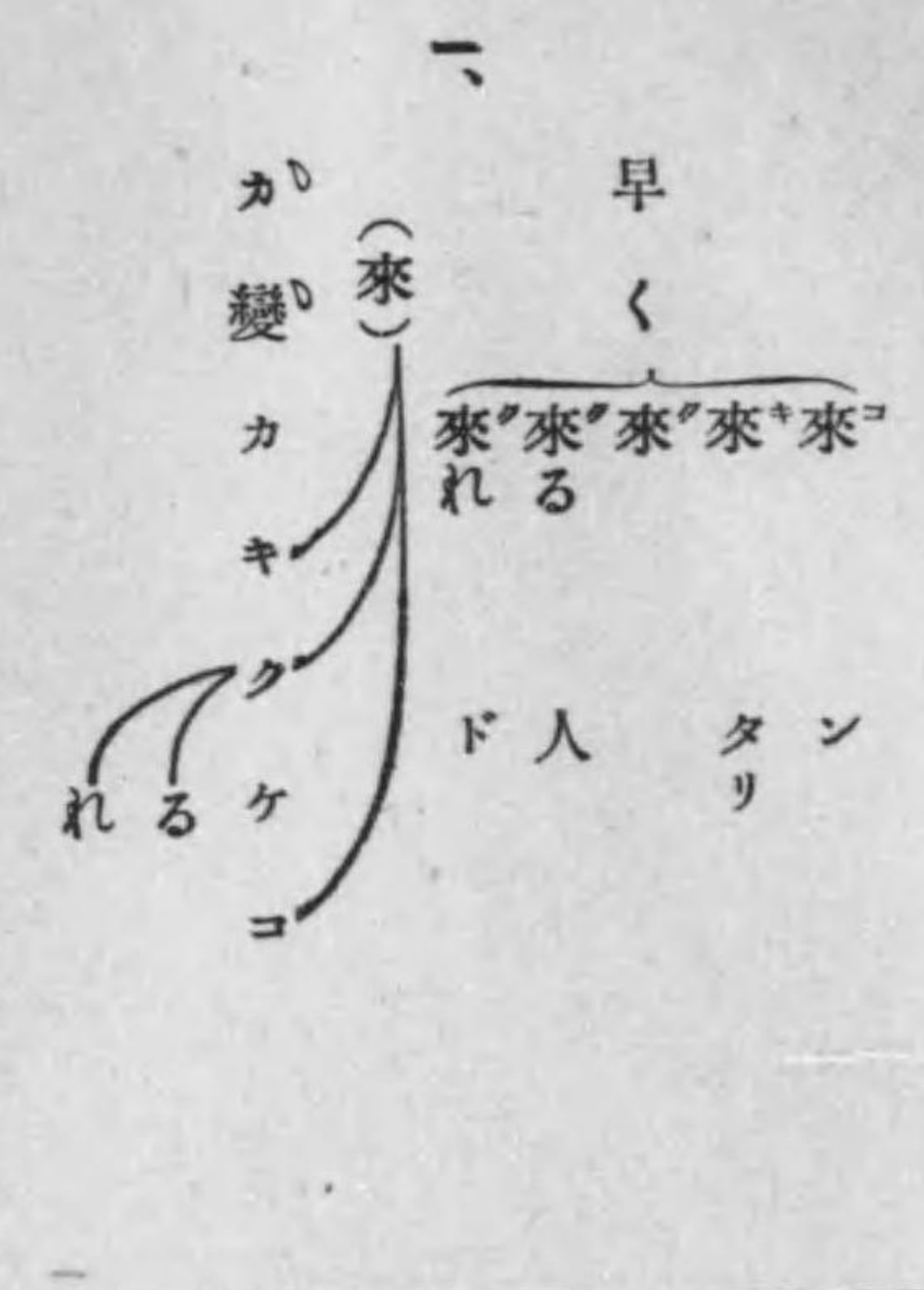
文

語

口

語

例

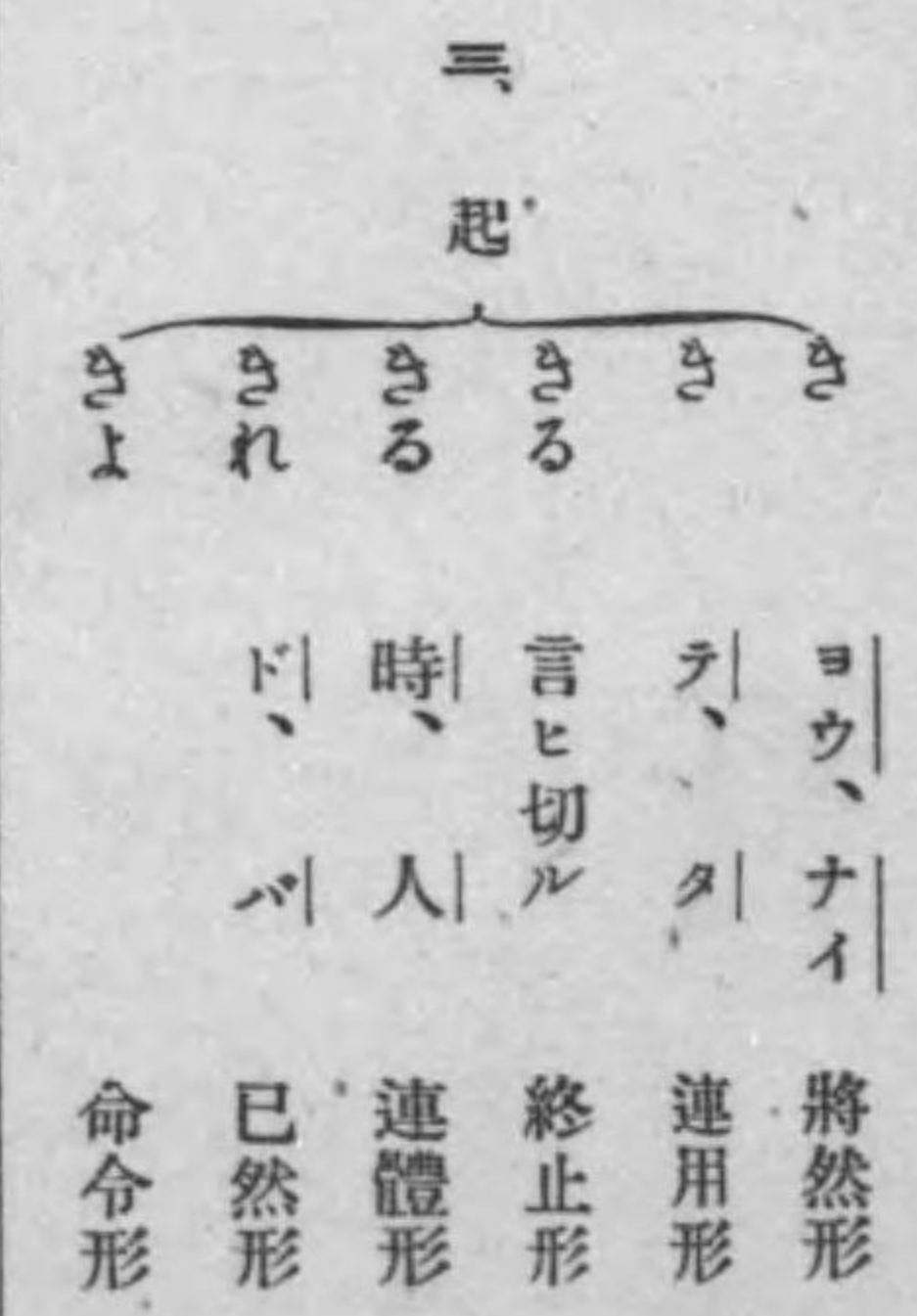
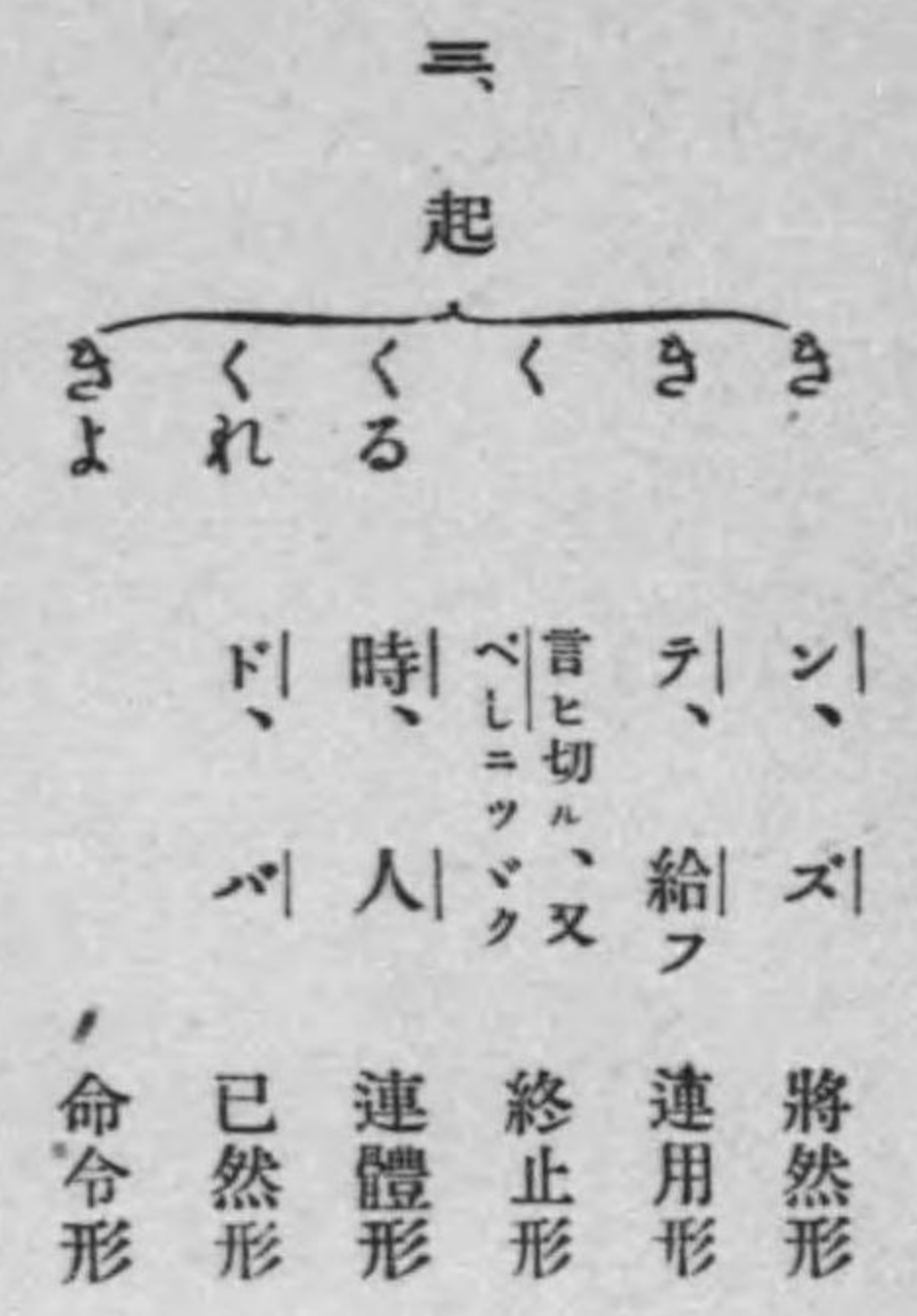
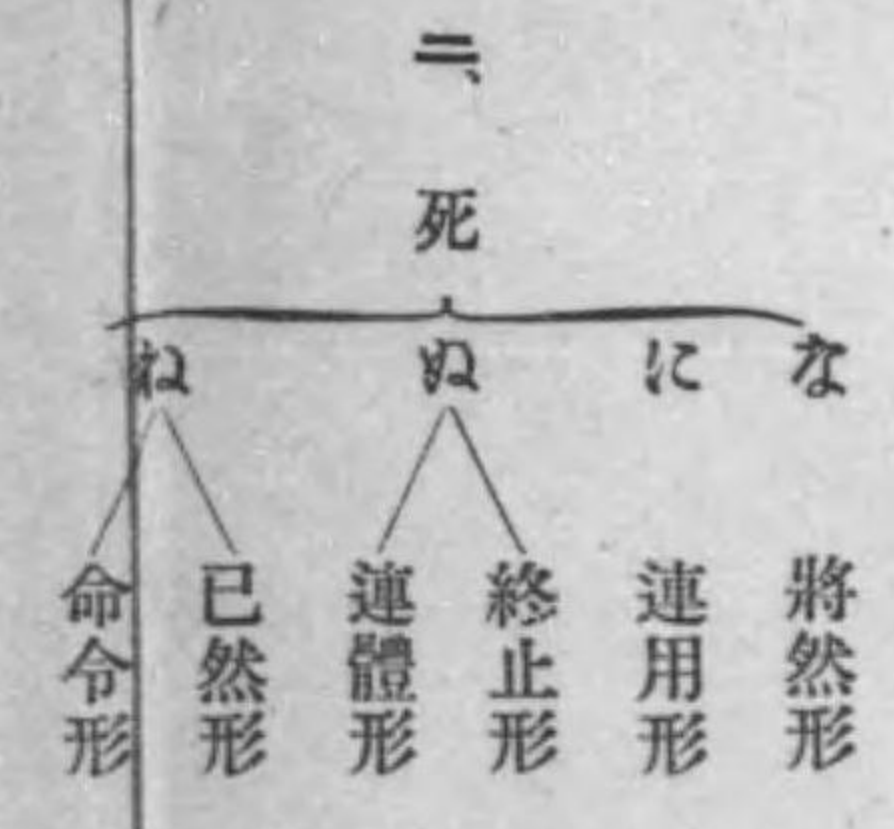
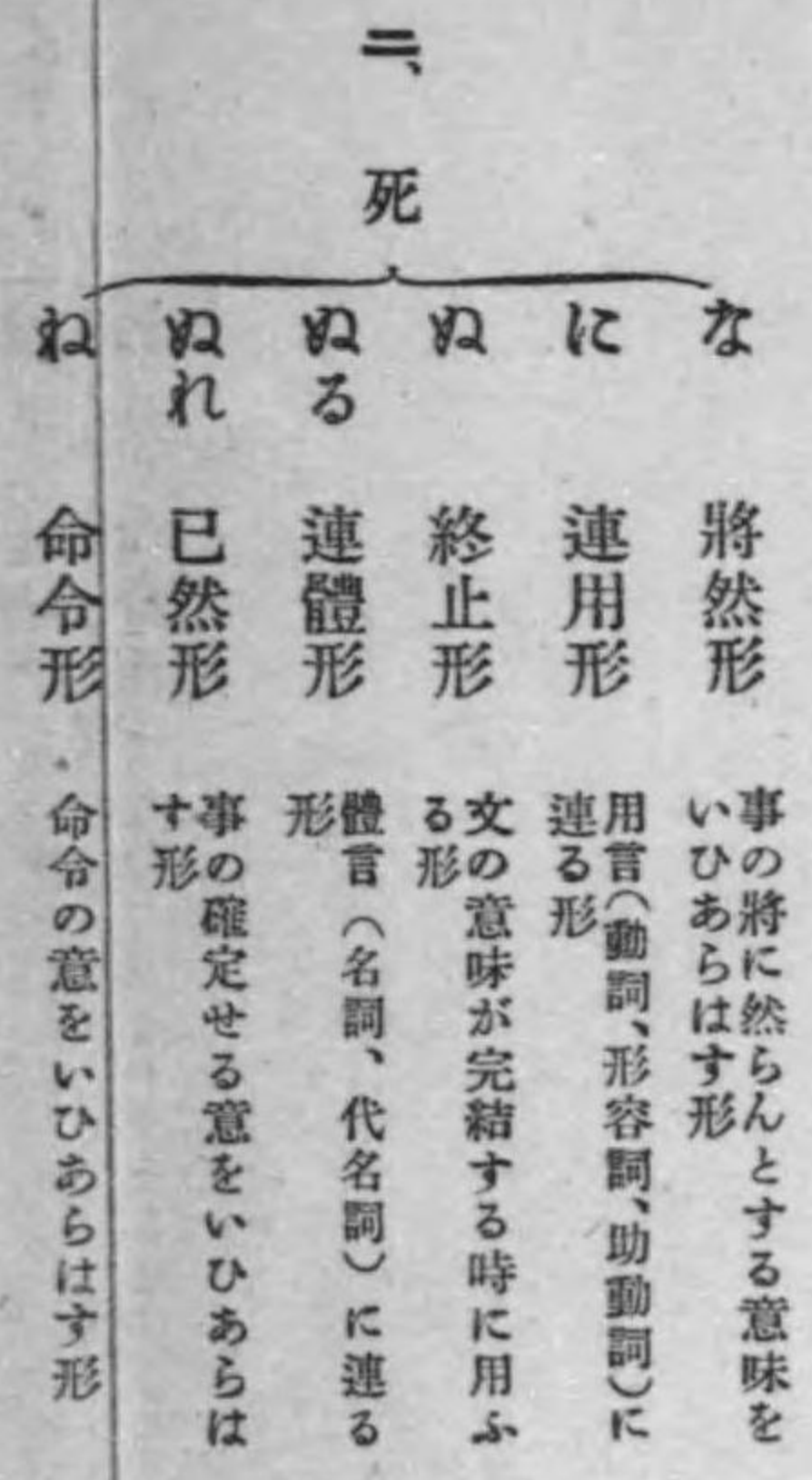


一〇 動詞の活用形

定義 動詞は皆六種の用法あるがために其の各の形をとる。

文	<p>病人 死なん 病人 死にたり 病人 死ぬ 死ぬる時まで 死ぬることを知らざりき かの人 死ぬれども遺族困らず 潔く 死ぬ</p>
口	<p>もはや 死なう 病人が 死んだ 病人が 死ぬ 死ぬる時まで働いた かの人 死ぬれども遺族は困らない 立派に死ぬ</p>
語	

○以上六種の用法に便宜上左の如き名稱を付す。



○活用形を簡易に知るには次の如く連る詞によりて見るべし。

(備考) 四段、ナ變、ラ變を除く他の動詞の命令形には感動詞よをつけて用よ。

[練習十] 左の動詞につきて文語、口語各の六種の活用形を示せ。

- 習ふ、聞く、落つ、過ぐ、居る、似る、有り
- 得、貯ふ、蹴る、來、おはす、察す、居り

一 動詞の活用表

變サ 格行	變カ 格行	下 一段	段 二 下			段 一 上		段 二 上		變ラ 格行	變ナ 格行	段 四	種類	文																				
			ワ	ラ	マ	ハ	タ	サ	カ						ア	ワ	マ	ハ	ナ	ラ	マ	ハ	タ	サ	カ									
爲	來	蹴	植	枯	榮	眺	教	兼	育	瘠	受	得	居	見	干	似	著	射	懲	老	恨	用	落	起	有	死	取	讀	習	立	推	書	語根	
せ	こ	け	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	ひ	ち	き	ら	な	ら	ま	は	た	さ	か	將然	
し	き	け	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	ひ	ち	き	り	に	り	み	ひ	ち	し	き	連用	
す	く	ける	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ゐ	み	ひ	に	き	い	る	る	ゆ	む	ふ	つ	く	り	ぬ	る	む	ふ	つ	す	く	終止
する	くる	ける	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ゐ	み	ひ	に	き	い	る	る	ゆ	む	ふ	つ	く	る	ぬ	る	む	ふ	つ	す	く	連體
すれ	くれ	けれ	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ゐ	み	ひ	に	き	い	れ	れ	ゆ	む	ふ	つ	く	れ	ぬ	れ	め	へ	て	せ	け	已然
せよ	こよ	けよ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	ゐ	み	ひ	に	き	い	よ	よ	い	み	ひ	ち	き	れ	ぬ	れ	め	へ	て	せ	け	命令

變サ 格行	變カ 格行	段 一 下			段 一 上		段 四		種類	口																								
爲	來	蹴	植	枯	榮	眺	教	兼			育	瘠	受	得	居	見	干	煮	著	射	懲	老	恨	用	落	起	有	死	取	讀	習	立	推	書
し	せ	け	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	ひ	ち	き	ら	な	ら	ま	は	た	さ	か	將然	
し	き	け	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	ひ	ち	き	り	に	り	み	ひ	ち	し	き	連用	
する	くる	ける	ゑ	る	え	め	へ	ね	て	せ	ける	え	ゐ	み	ひ	に	き	い	る	る	ゆ	む	ふ	つ	く	る	ぬ	る	む	ふ	つ	す	く	終止
する	くる	ける	ゑ	る	え	め	へ	ね	て	せ	ける	え	ゐ	み	ひ	に	き	い	る	る	ゆ	む	ふ	つ	く	る	ぬ	る	む	ふ	つ	す	く	連體
すれ	くれ	けれ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	けれ	え	ゐ	み	ひ	に	き	い	れ	れ	ゆ	む	ふ	つ	く	れ	ぬ	れ	め	へ	て	せ	け	已然
せよ	こよ	けよ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	ゐ	み	ひ	に	き	い	よ	よ	い	み	ひ	ち	き	れ	ぬ	れ	め	へ	て	せ	け	命令

〔練習十一〕 次の文中に於ける動詞の種類及活用形を示せ。

- 一、出入口に履物の置き亂れたる家には盗人のうかゞふこと多しといへり。
- 二、暗き時にも手探にて用を足し得る様に整へ置くは主婦たるものゝ務なり。
- 三、煙草の吸ひがらより大火事を引き起し、こと其の例數ふるにいとまあらず。
- 四、主婦は老人にいたはりかしづく外、幼児を育て上ぐる大任あり。
- 五、其の母によりて、其の子を察せよ。
- 六、日々の暮しは、入るを計つて出づるを制すを第一義とす。
- 七、頭には霜をいたゞき、身にはつゞれをまとふ。
- 八、道行く人の投げ與へる喜捨を待ちわびて居る。
- 九、日は既に西へ傾いて、祭見物の人々は段々歸りはじめる。
- 十、最早弾く力も盡きて、傍の石に腰を下し、額を両手に支へて、人知れぬ涙をこぼして居る。
- 十一、聽衆は四方から集つて來て、見る内に人山を築いた。

〔練習十二〕 次の文中の口語を文語に、文語を口語に改めよ。

- 一、惡に報ゆるに善を以てす。
- 二、風が身にしみる。
- 三、木を植ゑる人がある。又水をかける人もある。
- 四、死ぬるも生くるも天命なり。
- 五、猿も木から落ちる。
- 六、彼の人は常に讀書をする。
- 七、庭に流るゝ水あり。
- 八、捨てる神あれば拾ふ神あり。
- 九、私は彼の人を信ずる。
- 十、月落ち夜明く。
- 十一、朝は五時に起きる。
- 十二、犬も子を育てる。

一二形容詞

定義

事物の性質、有様をいひあらはす語。

用 活		例	
種類	種類	文	口
語根	語根	語	語
語	語		
尾	尾		
種類	種類		
語根	語根		
語	語		
尾	尾		

用 活		例	
種類	種類	文	口
語根	語根	語	語
語	語		
尾	尾		
種類	種類		
語根	語根		
語	語		
尾	尾		

一、
赤き花
今日は樂し
あはれなる少女
月皎々たり
善き行
美しき花多し
完全なる人格
人出多かりき

赤い花
今日は樂しい
あはれな少女
月がよい
善い行
美しい花が多い
完全な人格
人出が多かつた

二、
善
あはれ
なれ なる なり なら
けれ きれ しく
ナリタリ
ド人

善
あはれ—な
けれ きれ いく
ナッタ
ド人

〔備考一〕

形容詞は凡て主語、補足語を修飾し又説明語に用ひらる。

〔備考二〕

多かり、あはれなり、皎々たりの如くかりなり、たりの活用ある語は之を形容動

詞ともいふ。

〔備考三〕

形容詞の語尾なり、たりと指定の助動詞(後に出づ)なり、たりとは活用同じけれ

は紛れ易し。注意すべし。

形容詞

指定の助動詞

説明巧なり

これは机なり

男子は堂々たれ

子女たり生徒たるものは

〔練習十三〕 次の語の品詞及活用を検査せよ。

- 無し、 有り、 富む、 貧し、 若し、 老ゆ、
- 悲し、 悲しむ、 喜ぶ、 喜ばし、 勵む、 烈し、

一三 形容詞の活用形

定義

形容詞も動詞と同じく六種の活用形あり。

例		文		口	
<p>多 かかれ かる かり かり かり 命 命</p> <p>悪 ○ しけれ しき しく 終 連 將 命 然 體 止 用 然</p>		<p>行儀あしくば言葉もあしからむ 行儀悪しくなりぬ 行儀悪し 彼は悪しき者なり 行儀悪しければ叱らる</p>		<p>○ しく 終 連 將 し 止 用 然 し 體 止 用 然 し 體 止 用 然 し 體 止 用 然</p> <p>色があしくなつた 色があしい あしい色になつた 悪しければ取りかへる</p>	

活 用 表		種 類		語 根		語 尾	
たり活用	なり活用	かり活用	しき活用	善	悪	終止	連體
た	な	か	し	善	悪	終	連
た	な	か	し	善	悪	止	體
り	り	り	き	善	悪	連	然
活	活	活	け	善	悪	用	命
用	用	用	れ	善	悪	然	令
活	活	活	れ	善	悪	命	
用	用	用	○	善	悪		
活	活	活	○	善	悪		
用	用	用	○	善	悪		
活	活	活	○	善	悪		
用	用	用	○	善	悪		

〔備考一〕「善きを取り悪しきを捨つ」の文中の「善き」「悪しき」は連體形にて名詞の省かれたるものなり。

〔備考二〕形容詞の語根に「み」「げ」「さ」接尾語が結びつきて名詞となる。
例 深み、樂しげ、高さ。

〔練習十四〕次の文中の動詞、形容詞を指摘し其の種類及活用形を示せ。

- 一、世に美しき花多し、又上品なる花も少なからず。
- 二、されど美しくして、且つ上品なること櫻の花の如くなるはなかるべし。
- 三、八重櫻は花の咲くこと山櫻よりもおそし。
- 四、その花は輪大きくして、色最もうるはし。
- 五、思へば夏の天地はまことに壯快なり。
- 六、梢をわたる且の風空に峙つ雲の峰、さては天の鼓のとゞろきめぐつて雷雨の沛然として至るなどいづれかをかしからざらむ。
- 七、意味なき怠に快からず長き日を暮さんはいと惜しむべし。
- 八、初秋の風涼しう覺ゆるほど心地よきはなし。

一四助動詞

定義

動詞に添うて其の意味を助くる語なれども、稀には名詞、代名詞の下につき、また他の助動詞にもつく。

例		文	語	口	語
る、	らる、	笑はる、	賞せらる、	笑はれる、	賞せられる、
す、	さす、	習はす、	讀みたり、	習はせる、	讀んだ、
なり、	たり、	善き人なり、	やさしき人ならむ、	善い人だ、	やさしい人だらう、
ず、	ざり、	まじ、	じ、	ぬ(ん)、	ない、
つ、	ぬ、	たり、	り、	た、	だ、
き、	けり、	む、		ら(よう)、	だらう、
らむ、	らし、	べし、	べかり、	らしい、	やうだ、
めり、	まし、	けむ、		たい、	
たし、	まほし、			やうな、	
ごとし、					

〔練習一六〕 次の文中の助動詞を指摘し、かつ其の種類を説明せよ。

- 一、今日は秋なり。天の高きを見ずや。
- 二、白雲深き處に春を賞せしはこゝなりき。
- 三、恰も明鏡に向ひたらむが如し。
- 四、喜怒哀樂はうちつけに他人に分つべきにあらず。
- 五、他人の惡徳は淑女の口にすべからざるものなり。
- 六、皆様御機嫌よくいらせられ候や。
- 七、印行せられて、世にあらはれたるもの已に多かるべし。

一五助動詞の種類

受身	可能	使役	指定	否定	時	推	量	希望	比較
<p>る らる</p> <p>子供犬に噛まる。 生徒教師に賞せらる。</p>	<p>る らる</p> <p>小學校の生徒にも讀まる。 この問題には答へらる。</p>	<p>す さす しむ</p> <p>本を讀ます。 塵を捨てさす。 字を習はしむ。</p>	<p>なり たり</p> <p>嬉しと思ふなり。 父父たらざれども子子たり。</p>	<p>ず ざり じ まじ</p> <p>花咲かず。 能はざるにあらず爲さざるなり。 君はまだ遠くは行かじ。 虚言は言ふまじ。</p>	<p>過去 き けり</p> <p>曾て向島に遊びき。 昔某といふ人ありけり。 行きつ戻りつ。 かくて今日も暮れぬ。 彼は學校に行きたり。 夏休は來れり。 未來 む り</p>	<p>らむ らし べし べかり めり む まし けむ</p> <p>何事のおはすらむ。 雪降るらし。 雨降らざるべし。 時節とぞいふべかりける。 秋も往ぬめり。 風にやならむ。 雨にやならまし。 方向や悪しかりけむ。</p>	<p>たし まほし</p> <p>早く行きて見たし。 花の如くあらまほし。</p>	<p>ごとし</p> <p>霜雪の如し。</p>	

〔備考一〕 以上の受身可能使役の助動詞は又尊敬の助動詞となる。
 る 母書を讀まる。
 らる 父も大に満足せらる。
 す 姫君書を讀ませ給ふ。
 さす 大に民心を得させ給ふ。
 しむ 御位に即かしめらる。

〔備考二〕 なりは體言にもつきたりは體言にのみつく。(形容動詞を参照すべし)

〔備考三〕 未來のむは通例んと發音し又んとも書く。推量のむも同じ。

〔備考四〕 推量のべしは又種々の意をいひあらはす。
 決心 誓つて勉強すべし。
 可能 あれば武夫の行といふべし。
 命令 明日出頭すべし。

〔備考五〕 べかりにすがつきて禁止不可能の意となる。
 此所へ塵を捨つべからず。
 この品といへども容易には造るべからず。

一六助動詞の活用

定義 助動詞にも六種の活用形あり。

種 類	受 身	可 能	使 役	指 定	否 定	時			推	量	希 望	比 較
						未 來	完 了	過 去				
助動詞	る	る	す	たり	ず	き	けり	つぬ	たり	む	む	ごとし
將然	られ	られ	せ	なら	ず	けり	けり	て	べく	○	○	ごとか
連用	られ	られ	せ	なり	ず	けり	けり	て	べく	○	○	ごとか
終止	る	る	す	なり	ず	き	けり	つぬ	べし	む	む	ごとし
連體	る、	る、	する	なる	ぬ	し	ける	つる	べき	む	む	ごとか
已然	られ	られ	すれ	なれ	ね	しか	けれ	つれ	べけれ	め	め	○
命令	れよ	れよ	せよ	なれ	○	○	○	○	○	○	○	○

例

一、譽め
 られ 將然 彼はほめられむ。
 連用 ほめられて喜ぶ。
 終止 彼ほめらる。
 連體 ほめらるゝもの少
 已然 ほめらるればうれ
 命令 人にほめられよ。

〔備考〕
 尊敬の助動詞は受身、可能、使役の
 助動詞の活用形と同じければ表
 には略したり。

二、讀みし
 終止 かの書を讀みき。
 連體 かの書を讀みしもの。
 已然 かの書を讀みしかど。
 命令 ○

三、行く
 將然 行くべくば行かむ。
 連用 行くべくもあらず。
 終止 我行くべし。
 連體 行くべきものは誰ぞ。
 已然 彼こそ行くべけれ。
 命令 ○

一七 動詞と助動詞との連続法

種動詞類の	例
四段	讀ま
ラ変	有ら
ナ変	死な
上二段	起き
上二段	見
下二段	捨て
下二段	蹴
カ変	來
サ変	爲
助動詞	將然
助動詞	助動詞
連用	連用
助動詞	助動詞
終止	終止
助動詞	助動詞
連體	連體
助動詞	助動詞

讀ま	(將然)	する
まむじざずし	り	む
まほし		
讀み	(連用)	けき
たけたぬつ	り	
しむり		
讀む	(終止)	ら
まめべべ	ら	
じりかりしし	む	
讀む	(連體)	なり
が		
ごとし		
讀め	(已然)	り

〔例外一〕過去の助動詞「き」はカ變、サ變の動詞に限り左の如く連る。

例 カ變 來^キし^カ と續きて來^キき、來^キきとは續かず。
 將然
 サ變 爲^キし^カ と續きて爲^キき、爲^キし、爲^キしかとは續かず。
 連用

〔例外二〕過去の助動詞「ぬ」はナ變の動詞には續かず。

〔例外三〕終止形に連る助動詞はラ變に限り、其の連體形に連る。

〔備考一〕完了の助動詞「り」は動詞四段の已然形とサ變の將然形とに連る。

例 四段 讀め (已然)
 サ變 爲 (將然) り

この「り」を居れり、異なれりと連ぬるは誤りなれども一般に許容せらる。

〔備考二〕「……せさす」といふべき場合に「せ」を略する習慣あるものは之に従ふも妨なし。

例 手習さす。 周旋さす。 賣買さす。(文法上の許容)

〔備考三〕「……せらる」といふべき場合に「……さる」と用ふる習慣あるものは之に従ふも妨なし。

例 罪さる。 評せらる。 解釋さる。(文法上の許容)

〔備考四〕「得しむ」といふべき場合に「得せしむ」と用ふるも妨なし。

例 最優等者にのみ褒賞を得せしむべし。(文法上の許容)

〔備考五〕 佐行四段活用の動詞と助動詞の「し、しかに連ねて「暮しし時」「過ししかばな」といふべき場合を「暮せし時」「過せしかばな」とするも妨なし。

例 唯一遍の通告を爲せしに止まれり。

攻撃開始より陥落まで僅に五箇月を費せしのみ。(文法上の許容)

〔備考六〕「ごとし」は助詞の「に」伴ひて體言に連り、助詞「が」に伴ひて連體形に連る。

例 霜雪の如し。 弊履を捨つるが如し。

〔備考七〕 助動詞の數個相互に連る場合も動詞に連る法に同じ。

例 時の夏なるを覺えざるなり。

心はゆたにあるべかりけり。

彼は已に出發せしならむ。

〔練習一七〕 左の諸文中にある助動詞の種類を示し、かつ其の何活用形なるかをも示せ。

一、金剛石も磨かずは玉の光は添はざらむ。

二、人をして見しむれば果して彼なりき。

三、過ぎたるはなほ及ばざるがごとし。

四、人に笑はれ譏らるゝは恥づべきことなり。

五、私はしようか、しまいかと思つた。

〔練習一八〕 次の文に誤りあらば正せ、文法上許容のものは断れ。

一、朝は五時に起きるべし。

二、日はまだのぼらまじ。

三、以上の條々固くこゝろえべし。

四、此の處に塵を捨つるべからず。

五、品物に手を觸れるべからず。

六、御心當り御覽下されまじく候や。

七、彼等は喜んでわが一行を迎へり。

八、金屬もて製すもあり。

九、某氏は昨日歸朝されたり。

十、彼の人も留學されるであらふ。

一八副詞

定義 動詞、形容詞又は他の副詞に添うて其の意味を修飾する語。

別類	例
<p>只、尙、稍、<u>しよく</u>……………固有の副詞</p> <p>今、昔、ゆめ、<u>ゆめく</u>……………名詞轉來の副詞</p> <p>終日、一向、巍然として……………熟語の副詞</p> <p>思ふに、極めて、恐らくは……………動詞轉來の副詞</p> <p>早く、軽く、能く……………形容詞轉來の副詞</p>	<p>盛に燃ゆ。</p> <p>熱心に掃除す。</p> <p>必ず行くべし。</p> <p>最も強き人。</p> <p>いとやさしき方。</p> <p>豈に樂しからずや。</p> <p>いと静に眠れり。</p> <p>誠に能く其の分を守る。</p> <p>動詞の意味を修飾するもの</p> <p>形容詞の意味を修飾するもの</p> <p>他の副詞の意味を修飾するもの</p>

〔練習一九〕 次の文中より副詞を指摘せよ。直接關係ある語をも示すべし。

- 一、極めて雄大な氣象に満ちて居る。
- 二、微臣今日の光榮を思つて、自ら涕涙の雙頬に流れ下るのを禁じ得なかつた。
- 三、朝の風が一しほつめたくて、空には雲の行き來があわたしい。今に霰でも降つて來さうな景色である。
- 四、打向ふ人の覺えずかたほ笑みて、暫しは心の憂さも忘るゝ様にあるべし。
- 五、見るからに心地よく透徹した大氣を靜にきはめて靜にくねらして村のお寺の鐘が其の平和な曲節を響かして來ます。

一九 感動詞

定義	例
事物に感動したる時發する語。	<p>あゝ悲し。 あな嬉しや。 待ち給へよ。</p> <p>あはれ都の花を見るかな。 とく行けかし。</p> <p>花をし見れば物思もなし。</p>
	<p>あゝ、 あな、 あはや、 あはれ、</p> <p>や、 よ、 やよ、 すはや、</p> <p>か、 かな、 かや、 かも、 かし、</p> <p>も、 ぞ、 し、 な、</p> <p>など、 しがな、 もがな、 ばや、</p>

二〇 接續詞

定義	例	別類
二つの語又は文の間におきて上下をつらぬる語。	<p>國語、漢文及び英語を學ぶ。</p> <p>能く學び 又 能く遊ぶ。</p> <p>雨降り 且つ 風 吹く。</p> <p>彼は名門の出なり。されど其行平民的なり。</p>	<p>一、又、 且つ、 及び、 尙、 それから、 (累加する意のもの)</p> <p>二、若しくは、 或は、 又、 はた、 就中、 (選擇する意のもの)</p> <p>三、されば、 かくて、 是を以て、 故に、</p> <p> ついては、 よつて、 それで、 (上下の事情當然の意のもの)</p> <p>四、されど、 併しながら、 但し、 尤も、 (上下の事情反對の意のもの)</p>

〔練習二〇〕 次の文中の感動詞と接續詞とを示すべし。

- 一、あなかしこ、このこがね夫の身に一大事あらむ時に參らせよ。
- 二、あつばれ馬や誰のものぞ。
- 三、その他装甲巡洋艦以下も亦或は撃沈し、或は捕獲し、或は抑留し、もしくは武装を解除せしめぬ。
- 四、今日は捕虜となりて引かれゆく、あはれといふも愚かなり。
- 五、かく朋友間の交際に信義あり、勇氣あり、しかも表裏なきは羨ましさ好風俗ならずや。

二一助詞 (てにをは) その一

定義

語と語との關係を明にし又は意味を添ふる語。

例

春過ぎて夏來る。 東京に着す。 書を讀めども。
 水は方圓の器に従ふ。 花子の本。 學校よりかへる。
 の、が、つ、に、を、と、へ、より、から、まで、
 は、ば、も、ぞ、なん、こそ、や、か、やは、かは、な…そ、
 だに、すら、さへ、のみ、ばかり、
 て、して、で、つ、ながら、まに、に、を、とも、ども、

主

に 東京に着きたり。
 へ 歐洲へ向ふ。
 は 勉強せば上達せん。
 と 水清ければ大魚住まず。
 と 裁縫と生花とを習ふ。
 (備考一) 語句を列擧する場合に用ふる助詞の「と」は誤解を生ぜざる時に限り最終の語句の下に之を省くも妨なし。
 例 月と花。
 宗教と道德の關係。
 最後の「と」を省くときは誤解を生ずる例。
 花子と太郎との玩具を見たり。
 花子と太郎の玩具を見たり。(文法上の許容)
 友と學校に行く。
 明日は參上いたしたしと存じ居り候。

助詞の用

(備考二) 助詞の「と」の動詞、使役の助動詞、受身の助動詞及時の助動詞の連體形に連續する習慣あるものは之に従ふも妨なし。
 例 月出づると見えて。
 嘲弄せらるゝと思ひて。
 終日業務を取扱はしむるといふ。
 萬人皆其の徳を稱へけるとぞ。(文法上の許容)
 や かの人を見知りたりや。
 か その時悔ゆともかひあらむや。
 か かの人を見知りたるか。
 今は何をかかくし申すべき。
 (備考三) 上に疑ひの語ある時に下に疑の助詞の「や」をおくも妨なし。
 例 誰にや問はん。
 幾何なるや。
 如何にすべきや。(文法上の許容)

二二助詞 (てにをは) その二

とも その時悔ゆとも何の甲斐かあらむ。

〔備考一〕 助詞の「とも」の動詞使役の助動詞及受身の動詞の連體形に連続する習慣あるものは之に従ふも妨なし。

例 數百年を経るとも。

如何に批評せらるゝとも。

強ひて之を遵奉せしむるとも。 (文法上の許容)

に 日暮れかゝるにやどるべき所なし。

を 水は昔のまゝに流るゝを榮華のあととはさらにとゞまらず。

ぞ 月ぞ出でたる。 (連體形)

なん 花なんうるはしき。 (連體形)

や 人やある。 (連體形)

か 何事とか仰せらるゝ。 (連體形)

こそ あはれにこそありしか。 (已然形)

いと口惜しきことにこそ。 (ありしか)

〔備考二〕 係結は文語にのみ用ひられ口語には用ひられず。

主なる助詞の用例

〔練習二一〕 次の文中の○の處を補ひて之を説明せよ。

一、目をさま○ば驚くべし。

二、目をさま○ば日已に高し。

三、御都合宜しく候○ば御出で下され度候。

四、時候誠に不順に候○ば御保養專一にと念じあげ候。

〔練習二二〕 次の文章に誤りあらば正して説明せよ。

一、明日はかしこに行きたくと存じ居り候。

二、一時の利を得るとも最後は知るべきのみ。

三、出席せるや否やを檢すべし。

四、敵も味方もやんやと喝采したりしとぞ。

五、何故に養生し給はぬや。

六、今や見頃なるべし。

二三 動詞の送り假名の注意

一、あ行は行や行、わ行の四行にわたりて互に紛れ易きものは次の要項を記憶して區別すべし。

イ、あ行に属するもの

下二段—得

ロ、や行に属するもの

上一段—射 鑄

上二段—老い 悔い 報い

下二段—絶え 断え 覺え 見え 聞え 生え 肥え 越え 冷え

消え 榮え 費え 潰え 凍え 煮え 癒え 吠え 燃え

萌え 殖え 聳え 悶え 冴え 萎え 甘え

ハ、わ行に属するもの

上一段—居 率む

下二段—植え 餓え 据え

ニ、以上の外は皆は行の假名と知るべし。

三、ざ行、だ行にわたりて互に紛れ易きものは次のざ行の動詞を記憶し、他のものはだ行の動詞と知るべし。

ざ行に属するもの

下二段—交ず

佐變(佐變にて語尾の濁るもの)—信ず 感ず 減ず 等

〔練習二三〕 次の文中の○の所には適當なる假名を補ひ、且誤あらば正せ。

一、低き杉垣を越○、小川に沿○て舞○行く。

二、年老○て悔○ともせんなし。

三、魂も消○ぬべく覺○たり。

四、家のはずれからほの白い水が見へる。

五、恐入り候えども御願ひ申上候。

六、この程の暑さ誠に堪え難く存じ候。

七、盲蛇に怖○ず。

八、池邊には花木を植○て四季の眺絶○ず。

九、山は高いと云われぬが中々幽邃である。

二四音便

定義

音を連ね呼ぶ時、發音の便宜上元の音を他の音に轉じ、從つてその假名をも書き變ふる事。

別	類
	<p>一、い音便<small>(き、ぎ、し、がいに轉ずるもの)</small></p> <p>開<small>き</small>いて……開<small>い</small>いて 悲<small>ひ</small>しきかな……悲<small>い</small>しいかな さ<small>さ</small>きは<small>ひ</small>(幸)……さ<small>い</small>いは<small>ひ</small> 仰<small>い</small>ぎて……仰<small>い</small>いで 醜<small>い</small>し……醜<small>い</small></p>
	<p>二、う音便<small>(ひ、く、み、等がうに轉ずるもの)</small></p> <p>笑<small>う</small>ひて……笑<small>う</small>て 思<small>う</small>ひて……思<small>う</small>て 逢<small>う</small>ひて……逢<small>う</small>て 嬉<small>う</small>しく……嬉<small>う</small>しう 辱<small>う</small>く……辱<small>う</small> こ<small>う</small>みち<small>(小路)</small>……こ<small>う</small>ぢ こ<small>う</small>ん<small>(困ず)</small>……こ<small>う</small>ぢ</p>
	<p>三、ん音便<small>(び、に、みがんに轉ずるもの)</small></p> <p>飛<small>ん</small>びて……飛<small>ん</small>んで 死<small>ん</small>にて……死<small>ん</small>んで 謹<small>ん</small>みて……謹<small>ん</small>んで あ<small>ん</small>さ<small>ん</small>びと<small>(商人)</small>……あ<small>ん</small>さ<small>ん</small>ど</p>
	<p>四、つ音便<small>(ち、び、りがつに轉ずるもの)</small></p> <p>待<small>つ</small>ちて……待<small>つ</small>つて 買<small>つ</small>ひて……買<small>つ</small>つて 當<small>つ</small>りて……當<small>つ</small>つて 勝<small>つ</small>ちて……勝<small>つ</small>つて き<small>つ</small>り<small>さ</small>き<small>(切先)</small>……き<small>つ</small>さ<small>き</small></p>

〔練習二四〕 次の文中の音便を指摘し、そのもとの音を示せ。かつその假名遣に誤あらば正せ。

- 一、お祖父様には何時もく御きげんうるはしゆう入らせられ候御事何よりも嬉しきさはみに御座候。
- 二、こは願ふてもなきさいはひなり。
- 三、吾若し明王に遇うて富貴を得ずんば誓つて天地の間に立たじ。
- 四、大きな倉の中に奥深く棲んで居つた。
- 五、その社に參つて、面白く遊んだこともありました。
- 六、好ましい美景と、尊い由緒のある過去とを有する懐しい國で御座ぬま
- 七、醉ふたるが如く、勞れたるが如し。
- 八、「げによき友よ」と其の人いと懐しうもなりぬべし。

三 う ふ

この假名は語の上にあるときは紛るゝことなし。
語の中若しくは下にあるとき紛れ易し。

う	まうづ	詣	申
まうけ	かうもり	蝙蝠	
はうむり	はうき	箒	
かうはし	やうやう	漸	
うう	すう	据	
思うて	行かう		
宜しう	戦うて		

(ひ、く、む等の音便)

かうべ 首 かうむり 被、冠 てうづ 手水
まらうど 客人

右の外はふの假名。

ふ	たふとぶ	尊
ゆふべ	あやふし	危
あふぎ	あふぎ	扇
きのふ	けふ	昨日
あふぐ	たふる	今日
たふる	等	倒

〔練習四〕 次の文字に假名をつけよ。

基、鳥居、鶯、言譯、寺參、鯉汁、
夕食、蠶、鹽、戒む、貴ぶ、圓居、

〔練習五〕 次の文中誤りあらば正せ。

- 一、きのう友を誘ふて梅見にまいりました。
- 二、社殿のかたわらには神木たかく聳えてとほとくあをがれたり。
- 三、先日は態々御ゐで下されありたく存じ候。
- 四、行かふ行かふと思ひながらつい行くおりがなかつた。
- 五、このあいだはあやうひ事だつた。
- 六、ぬのちがやふやくたすかつた。
- 七、家に着くのは午後の六時頃であらふ。
- 八、願ふてもなささひはひに御座候。

五 おをほ

この假名は一音のとき、又は語の上にあるときは、おとをと紛れ易く、語の中、若しくは下にあるときは、おは用ひざるが故に、をとほと紛れ易し。

を(上)

を	小、男、雄、緒、芋、
を ^と こ	男 ^{を^んな} 女
を ^ち	伯叔父 ^{を^は} 伯叔母
を ^つ と	夫 ^{を^さなし} 幼
を ^ど る	踊 ^{を^しむ} 惜
を ^し ふ	教 ^{を^はり} 終
を ^る	折 ^{を^り} 居
を ^か し	可笑 ^{を^がむ} 拜
を ^さ	長、箴 ^{を^の} 斧 ^{を^か} 岡
を ^ち こち	遠近 ^{を^ぎ} 荻 ^{を^かす} 犯
を ^ひ	甥 ^{を^とめ} 少女

右の外はほの假名。

を(中下)

を	竿	み ^さ を	操
い ^さ を	績	か ^を る	薫
し ^を り	栗	し ^を る	萎
あ ^を	青		
う ^を	魚	た ^を やめ	手弱女
		は ^せ を	芭蕉

右の外はほの假名。

お

お ^ほ し	多し
お ^と る	劣
お ^き な	翁
お ^る	織
お ^く	置
お ^く る	遅
お ^ど ろく	驚

(備考)

小	を ^が は	を ^ち	を ^と め
男	を ^の こ	を ^し	
折	を ^る	を ^り ふし	か ^を る

ほ

か ^ほ	顔
し ^ほ	鹽潮
な ^ほ す	直尙
と ^ほ り	通
こ ^ほ り	氷
等	

〔練習七〕 次の文に誤あらば正せ。

- 一、花瓶を机のうゑに据えをくべし。
- 二、かほれにおへ、園生の櫻。
- 三、あうげばたうとし、わが師の恩。
- 四、をごととおこたりとは最もいましむべきことなり。
- 五、この後はありあり御伺ひ申上げたしと存じあり候。

六じぢ

この假名は語の上中下とも互に紛れ易し。

ぢ

をぢ	伯叔父	おほぢ	祖父
こうぢ	小路	もみぢ	紅葉
はぢ	恥	ふぢ	藤
すぢ	筋	とぢ	閉
わらぢ	草鞋	みそぢ	三十路
うぢ	氏	なんぢ	汝
かぢ	梶、鍛冶	あぢ	味、鱈
ちぢむ	縮	あぢさゝ	紫陽花
		かうぢ	鮭
		ひぢ	臂
		ねぢ	振

右の外はじの假名。

じ

おなじ	同
はじめ	始
みじかし	短
くじく	挫
まじはる	交
まじふ	雜
しじみ	蜆
あるじ	主人
きじ	雉
等	
父	をぢ
路	こうぢ
	おほぢ
	ゆめぢ

〔練習八〕 次の諸問題中の圈點を附したる語に假名をつけよ。

- 一、我が家^をを興^{さん}と思^ふ心は未^だ一日も撓^{ます}ず。
- 二、人の棄^てたる苗^を拾^ひてそこに植^えつけけり。
- 三、山^路、紅^葉、匙^加減[、]麴^町、藤^原氏[、]立^居振^舞。
- 四、青^葉の草^木を生^け或^は面^白き繪^{など}を飾^るべし。
- 五、雨^始めて晴^れ、虹^{たち}ま^ちあらは^る。

〔練習九〕 次の文中に誤りあらば正せ。

- 一、はぢめありてあわりあるものは少し。
- 二、けうはふぢの山見へずくちあし。
- 三、恩を報ひさるは人のはじなり。
- 四、朱にまぢわれれば赤くなる。
- 五、おば様おぢ様にも御さわりなくゐらせられ候や。

八 オ列音、ア列音につゞく延音

オ列音につゞく延音

よう (む) 行つて見よう。
 もう (已に) もう行つて見ました。
 どう (如何) どう申上げてよいでせう。
 そう (層) たいそうよくなりました。
 どうく (遂に) どうく雨になりました。

此の他はア列音につゞく。

ア列音につゞく延音

やう (様) あのやうでは困ります。
 さう (左様) さう思ひました。
 うれしさうでした。
 かう (斯く) かうしておけば大丈夫。

〔練習十二〕 次の文中に誤あらば正せ。

- 一、海の面は波が立たなくて、鏡のようでごさぬます。
- 二、もう夜があけました。
- 三、してみやうか、せすにおこうか、どうしやうか。
- 四、餘寒なを厳しゆうございますがあなた様には何のお變りものう御元氣にいらせられますか。
- 五、心をしずめて丁寧書きなをしなさい。
- 六、子供は庭で楽しそうに遊んでおります。
- 七、かわゆいおさない子供等は同じやうに花を持っています。
- 八、そうゆう事はとうに忘れてゐました。
- 九、今日の雨はやみそうにもありません。
- 十、此頃の暑さなか／＼に絶えがとう存じ候折柄、皆々様には御かはりもなくいらせられ候や。
- 十一、試験もやうやうまじこ相成り候へば氣にかゝり申候。
- 十二、かへらじとかねて思へばあづさ弓なきかづにいる名をぞとむむる。

字音假名遣一覽

(漢字の右に印あるは濁音の字と知るべし)

- (一) い、 む
 む 維帷唯惟 章偉遠葦圍緯
 耐慰 胃謂 委萎 爲 位 威
 むん 員韻隕殞 院 尹 允
 わき 域 闕

(注意) この外は「い」の假名。但う列(ス、ツ、ユ、ル)の下にありて「い」の如くひゞくものはある。類、るゐ、推(する)の如し。

- (二) え、 ゑ
 ゑ 會繪 回廻 慧 畫 穢 衛
 ゑん 袁遠猿園轅 怨鴛苑宛婉 爰媛媛浚 圓 垣 冤
 えつ 越 越 鉞

(注意) この外は「え」の假名。

- (三) お、 を
 を 烏鳴 惡吳音汚汗
 をん 苑怨 園遠(以上吳音) 溫 穩
 をく 屋

(注意) この外はおの假名。

- (四) か、 く
 く わ 化花貨華 果菓華 戈 科 過 臥 火 瓜 瓦 寡
 くわい 灰恢 塊魁 回廻 悔悔 快 怪 懷 會 外 潰
 くわん 元玩頑 完冠 官管棺棺 卷圈 喚換 觀歡鐘灌
 貫慣 還環 願 關 寬 丸 患 款
 くわつ 活括濶刮聒 滑猾 月 豁
 くわく 獲穫鏃攫 郭廓 畫劃 擴

(注意) この外は「か(が)」の假名。

- (五) ぢ、 ぢ
 ぢ 持峙痔 尼昵 治 除 貳 爾
 ぢよ 女 除
 ぢん 陳陣 沈 塵
 ぢく 軸軸 竺 岬 忸
 ぢき 直(吳音)
 ぢつ 昵
 ぢう 重 住
 ぢやう 定(吳音) 孃
 ぢやく 著

(注意) この外は「じ」の假名。

- (六) づ、 ず
 ず ず(吳音) 誦 從 數 受
 ずゐ 隋隨 瑞揣 蕊

(注意) この外は「づ」の假名。

(七) お
 あふ押狎鳴 凹
 おう應鷹膺 歐謳謳甌 翁
 わう王往枉旺 皇凰 黃橫

(注意) この外はあうの假名。

(八) こ
 かふ甲匣鳴狎 合閣洽恰 盍闔楛
 こう 后垢逅 侯候喉猴 口吼叩扣苟鈎 構溝箒 工叩紅攻虹貢
 控鴻誼 巷港 公降 興厚 後孔 莖互 恆肯
 くわう皇惶惶篁 光晃恍 黃廣鑛宏 荒轟

(注意) この外はかう(がう)の假名。

(九) そ
 さふ挿 雜
 そう 憲總聰 曾增贈憎層僧 妻湊綽 叟搜
 宗崇綜 走嗽 叢宋 送雙 勿

(注意) この外はさう(ざう)の假名。

(一〇) と
 たふ答塔 沓踏 納
 と 東凍棟 同銅洞筒 童瞳 豆頭逗登燈
 とう 動働 桶冬 統透 藤等 投騰

(注意) この外はたう(だう)の假名。

(一一) の
 なふ(吳音) 納 衲
 のう農 能

(注意) この外はなうの假名。

(一二) ほ
 はふ法 乏
 ほふ法 乏
 ほう峯鋒烽蓬 奉俸捧 朋萌鵬崩 豐 封剖 某帽矛眸 貿 褒

(注意) この外はほう(ばう)の假名。

(一三) も
 もう蒙濛朦

(注意) この外はまうの假名。

(一四) ゆ
 ゆう勇 融 雄 裕 熊
 いふ邑悒 揖

(注意) この外はいうの假名。

(一五) よ
 よう用涌踊蛹 容溶蓉 庸備 雍膺 孕
 えう遙搖謠 夭妖妖 幼窃拗 要腰 曜耀
 えふ葉

(注意) この外はやうの假名。

(一六) ろ
 らふ蠟臘 薦
 ろう籠隴瀧聲 樓鏤 弄 陋 漏

(注意) この外はらうの假名。

(七) きよ — けふ 夾 狹 頰 缺 峽 挾 俠 協 脅 脇 怯 業
 けう 喬 橋 驕 嬌 轟 曉 驍 梟 教
 きよう 共 供 拱 恭 凶 兇 恂 胸 興 競 疑 恐

(注意) この外はきやう(ぎやう)の假名。

(六) しよ — せふ 妾 接 捷 睫 涉 業 攝
 せう 小 少 抄 鈔 宵 梢 霄 消 銷 道 召 昭 照 招 詔 沼 蕪 樵 笑 燒 蕭 簫
 しょう 松 訟 頌 鐘 鐘 踵 衝 升 昇 丞 蒸 乘 剩
 しょう 縦 蹤 聳 承 證 誦 稱 勝 繩 悚

(注意) この外は やう(じやう)の假名。

(元) ちよ — てふ 蝶 牒 課 喋 疊 帖 貼
 てう 朝 潮 嘲 兆 挑 詭 晁 窈 眺 超 迢 彫 凋 調 烏 吊 條 趙 釣
 ちよう 重 徵 徵 冢 塚 寵 澄

(注意) この外はちやう(ぢやう)の假名。

(三) ひよ — へう 表 俵 粟 標 漂 瓢 飄 苗 鏞 描 廟 眇 渺 颯
 ひよう 氷 馮 憑

(注意) この外はひやう(びやう)の假名。

(二) みよ — めう 吳 音 苗 猫 妙
 みやう 吳 音 明 名 茗 命 冥

(注意) みやうの字なし。

(三) りよ — れふ 儻 釐 寮 寥 蓼 了 料 聊
 りよう 凌 綾 陵 菱 稜 龍

(注意) この外はりやうの假名。

(三) きゆ — さふ 及 吸 汲 級 笈 給 翁 泣 急
 (注意) この外はきり(ぎり)の假名。

(四) しゆ — しふ 輯 葺 緝 楫 十 汁 什 拾 集 執 習 澁 濕 襲
 (注意) この外はしう(じう)の假名。

(三) にゆ — にふ 吳 音 入
 にう 吳 音 柔 乳

(注意) にゆの字なし。

(六) りゆ — りふ 立 粒 笠
 りう 留 溜 瘤 流 柳 劉 陸 龍

(注意) りゆの字なし。

322
164

大正六年十月十二日印刷
大正六年十月十五日發行

定價金四拾五錢



編者 大石市太郎

發行者 上原才一



印刷者 四海民藏

發行所 光風館書店

(電話本局二千三十九番)
(振替口座東京三二七番)

東京市神田區裏神保町六番地

東京市神田區裏神保町六番地

終

